

こうした一連の深いつながりをもつ諸活動に対し、われわれは昨年より調査し、考察し、研究を進めてきた。これらのデータの中には附属という特殊性によるものがあり、また中・高が教官面、施設面その他生徒の活動場面の一部まで完全に一体化しているという本校だけの特殊事情の影響もないとは言えない。それに都会の学校がしだいにマンモス化している現在、学級増の完成年度においてさえも中・高6学年合わせて15学級という小規模学校の特殊性があるかも知れない。

しかしわれわれのこの研究は毎日毎日を生徒指導に努力しながら、その失敗あるいは成功の記録を1つつ1つみあげたものであり、常識的なことの裏付け的なものでもあるが、これら実践的資料の累積が今後の生徒指導の問題に役立つであろうことを期待し、われわれの意図と努力の一端をくみとって頂けるならば、そして幾分でも参考の資に供されるならばこれ以上の幸いはないと考える。

(原田・戸苺)

第6報 生徒の道徳性・親子関係

— 指導のための基礎調査 —

1. まえがき

生徒指導を適切に行なうためには、生徒の実態を適切に把握することが必要である。我々現場の教師にとっては、毎日の生活の中での指導と観察にもとづく直観的な把握が何よりも大事であることはいままでもないが、それを客観的に裏づけ、時としては修正し、或いは直観的には正しいと考えられることと、客観的なデータとの差異にぶつつかって、その差を生ぜしめた原因がどこにあるかを考えてみることも、大事なこ

とである。SS)の分布をパーセントで現わしたものが表①の右側である。左側の全国標準の理論上の分布と対照してみていただくと、本校生徒の場合、中学ではピークが(+1)のところである。ただし中3になるにつれてやや下っていく傾向がみられる。その傾向は高校にいくにつれてますますはっきりしてきて、大体においてピークははっきりと(0)にうつり、全国的高校の標準とはほぼ同じになり、(-2)は全国的な理論上の分布よりふえている。

このことは、中学と高校との道徳意識の発達過程を

表 ①

MSS	パーセンタイル分布 (理論上の)		中1	中2	中3	中 全体	H1	H2	H3	高 全体
75~以上	1%	} + 2								
65~74	6%		7	3	3	5	1	3	2	1
55~64	24%	+ 1	64	47	42	51	29	25	25	27
45~54	38%	0	27	47	49	41	48	37	36	42
35~44	24%	- 1	2	3	5	2	18	22	20	20
25~34	6%	} - 2			1	1	2	9	12	7
24以下	1%						2	4	5	3

とである。

その観点から、中学・高校全体にわたって道徳性診断テスト注①を、中学のみに親子関係テスト注②を実施した。その結果を整理して、大要次のような一般的傾向と問題点をとらえることができたように思う。

注①②とも田研式、田中教育研究所人格研究部 日本文化科学社発行

2. [道徳性]の一般的傾向

中1から高3にかけて、道徳性の診断値(偏差値M

も意味しているのではないかと、と思われるが、とにかく考えさせられる。本校では附属中学の卒業生の大半が附属高校に入り、外部の中学から約半数入る(現高3の入学時は約20名位)ので、外部からの高校入学者の故のみとは考えられない。やはりひとつの中学—高校での変化という要因を大きく考える必要があると思うのである。

その点から、第2表の領域別のパーセンタイルの変化を分析的に考察してみよう。

A=自己 B=家庭 C=友人 D=社会

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

表 2.

	中 1	中 2	中 3	中学	高 3	高 2	高 1	高校
A	70	60	70	66.7	46.7	45	50	47.2
	(80)	(80)	(75)	(78.3)	(43.3)	(35)	(45)	(41.1)
B	60	60	55	58.3	40	30	30	33.3
	(60)	(70)	(55)	(61.6)	(33.3)	(40)	(40)	(37.7)
C	80	75	80	78.3	50	52.5	45	49.2
	(85)	(75)	(72.5)	(77.6)	(60)	(45)	(70)	(58.3)
D	87.5	70	80	79.2	56.7	30	30	38.9
	(90)	(80)	(80)	(83.3)	(63.3)	(70)	(30)	(54.3)
MSS	56.8	54.4	53.8	55.09	50.1	47.2	45.3	47.9
	(57.5)	(55.4)	(54.9)	(55.9)	(50.0)	(52.2)	(49.8)	(50.6)

() 内は女子のみを示す。 数字はパーセントである。

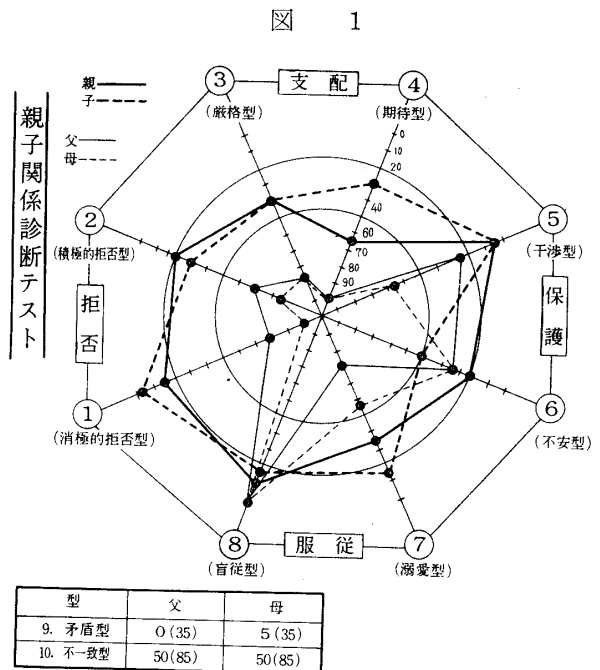
B (家庭) が中学と高校では大きくちがってきている。これは、高校生の青年期的特長と、一つには受験勉強をめぐる家庭の期待と重圧との関係も原因になっているのではなかろうかと思われる。

3. [親子関係] の一般的傾向

その点をもう少し考えるために、中学での [親子関係] の変化を考察してみよう。

親子関係テストは、次の図1に示すような、①～⑧までのタイプと、矛盾、不均一をみる⑨⑩との10の領域ごとに、親→子の意識度と、子→親の意識度を、父母別に測定しようとするもので、50パーセンタイル以内 (内側の円内) は安全、50～20パーセンタイル (外側の円と内側の円との間) は準危険域、外側の円より外の20パーセンタイル以下は危険域を示している。

(※図表の数値は後述高1-Cのケースのものである) そして親の方が子よりも意識度が危険域側にあるも



のを親>子, その反対を親<子であらわしたものが, 表3.である。(例図は親>子である。)

表 3

		親 > 子		親 < 子		親 = 子		全 体		
中1.	男	2	4	1	9	2	1	3	8	4
	女	2	7							
		計 5 1		3 0		3		8 4		
中2.	男	2	4	1	6	2	2	6	8	7
	女	2	0							
		4 4		4 1		2		2 5 5		
中3.	男	2	7	1	3	1	1	1	8	4
	女	2	4							
		5 1		3 2		1		8 4		

これで見ると親の方が子よりも気をもみ、子の方は案外の手伸びしているものがやや多いように見える。親は気にとめず、子の方が強く感じている（親<子）のタイプの数が問題になるが、中学2年がやや多いように見えるのは、中2という時代の一般的傾向なのか、それともこの学年独自のものなのかは、更に再調査して確かめる必要があると思われる。

更にその①～⑩の領域ごとに、安全圏内=0，準危険域内=1，危険領域内=2，として学年男女別に集計した値（強化値とよぶ）が表4で示してある。

表 6.

親子関係		危険度の高いもの		男女比
中1	A 男 5	B 男 4	9	9 : 12
	女 6	女 6	12	
中2	A 男 8	B 男 5	15	15 : 10
	女 3	女 7	10	
中3	A 男 9	B 男 6	15	15 : 0
	女 0	女 0	0	

表 4

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
強化値	男 中1	43	41	58	47	21	33	43	34	39	72
	(48)	56	42	37	52	44	53	46	36	41	76
	中2	47	58	59	65	23	57	55	39	56	47
	(52)	63	71	71	85	56	66	71	48	62	68
	中3	55	57	44	45	24	36	36	43	53	53
	(49)	55	56	42	59	51	69	45	40	47	69
V 値	中1	54	50	45	46	25	37	46	39	46	42
	(40)	61	57	38	59	54	50	43	41	55	56
	中2	25	31	38	45	18	39	54	41	38	45
	(41)	39	49	42	55	51	19	18	43	50	61
	中3	40	27	35	25	8	32	38	33	32	47
	(40)	43	27	26	41	34	48	55	29	46	56

表 5

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
男	%	27	30	32	26	9	23	28	26	27	33
		29	31	25	32	24	39	38	24	31	45
全	%	28	32	38	28	11	22	26	25	30	31
		27	34	31	37	23	36	33	23	30	44

()内は実人員。

各学年とも上段の数は父と子との、下段の数は母と子との関係である。

同じ値を中学全体にわたって全学年と男子のみについて百分率で示したものが第5表である。

(女子は全体と男子との差で推定できる)

更に同じ値の個人的集計が30 (10×1+10×2=30) をこえるものは、危険度の高いものとみなして、その人数を学年組男女ごとに示したものが第6表である。

この第6表でめにつくことは、危険度の高いものの男女比が、中1で3 : 4，中3で15 : 0と、いちじるしく男子が学年進行につれて高くなっていることである (この傾向はこの調査だけでは確言することはでき

ず、更にやや間隔をおいて、更に異なった対象において確かめる必要があると思うが、この調査だけでいうならば。)

これは、男の子に対する親の期待が女の子に比して、いちじるしく、高校入試をひかえて高くなるということ、その圧力への子の反応の現われ—とみることもできるかも知れない。

4. 個人指導のための分析

上に考察してきた道徳性 (MSS) と親子関係の調査の結果と、本校で行なっている個人指導カードに記入された生徒たちのケースを更に結びつけて考察を加えてみたい。

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

㊦ MSS の悪いものとよいもの

MSS の悪いものには2つのタイプがあるように思われる。一つは<そうであろう>とうなづけるもの、もう一つは最初は意外であるが、よく考えると、<まじめに記入しなかったのであろうが、そこでの不まじめさは、日常の言行からしてなるほどな>とうなづけるものである。これはやはり、指導の際、対処のしかたをちがえる必要があると思われる。

MSS のよい生徒は、大体うなづけるものたちであるが、時として意外なものもある。これはこのテストが、あくまでも道徳性の意識についての診断テストなのであって、ほんとうの道徳性行動の診断テストなんかではないという明白な限界をここであらためて再認識させられるわけである。ただ、例えば表8の高3のMSS 62の(ソ)とか(タ)とかは、大体においていいが、例えば(ソ)はD領域が40、(タ)はA領域が50という風に、ある領域が悪く、全体のバランスがくずれていることがめにつく。そして、これは我々の観察からすれば、なるほどとうなづかせるものをもっていることは事実である。このいみで、むしろMSSの数値は全体的傾向を把握する時に役立つ程度で、個人指導の際にはA～Dの各領域のパーセントイルの値の差

MSS の悪いもの 表 7

学年	生徒氏名記	MSS	A	B	C	D
H 1	ア	0	1	1	1	1
	イ	0	1	1	10	1
	ウ	28	10	35	1	5
	エ	31	5	5	5	10
	オ	36	40	10	30	1
	カ	36	10	5	30	10
	キ	38	10	10	1	90
	ク	38	25	10	5	50
H 2	ア	0	1	1	1	1
	イ	0	1	1	1	1
	ウ	0	1	10	1	1
	エ	21	1	1	5	10
	オ	21	1	1	20	5
	カ	25	40	50	10	1
	キ	28	40	5	1	10
	ク	28	1	30	1	5

によって示されるバランスのくずれにこそ注意すべきではなからうかと思われる。このことは更に、次の個人指導カードとの関係をみれば一層その感を強くさせられるようである。

MSS のよいもの 表 8

学年	生徒氏名記	MSS	A	B	C	D
H 2	サ	69	99	95	99	90
	シ	64	95	95	80	70
	ス	62	90	70	80	99
	セ	61	80	95	95	50
	ソ	61	95	90	80	50
	タ	61	50	70	99	90
	チ	61	90	90	60	90
H 3	サ	68	80	99	99	99
	シ	66	95	99	95	40
	ス	63	80	90	99	90
	セ	63	80	95	99	40
	ソ	62	95	95	80	40
	タ	62	50	70	99	99
	チ	62	90	50	99	99

㊧ 個人指導カードと MSS

本校では昨年度も発表したように全教官が個人指導カードをもち、指導の必要ありと認めた都度、記入して、担任に連絡し、指導部の棚に集積することになっている。(パンチ式で利用しやすくなっている。)そこから3回以上(昨年度から1年半の間に)記入されたものをえらんで、その回数とMSSとの関係をしらべたものが第9表である。これをみるとMSSは案外高いものが多い。

表 9

学年	回数	姓名記号	偏差値 MSS	パーセントイル				段階
				A	B	C	D	
高 1	3	a	58	35	99	90	95	+1
	3	b	91	80	90	95	95	+1
	3	c	64	80	99	99	80	+1
	3	d	48	50	30	80	60	0
	4	e	(長欠でテストを受けず)					
	6	f	60	70	90	80	99	+1

高2	3	a	39	40	15	5	30	-1
	3	b	61	90	70	60	99	+1
	3	c	52	99	50	20	30	0
	3	d	62	90	70	88	99	+1
	3	e	55	40	90	60	70	+1
	3	f	61	99	90	80	30	+1
	3	g	54	40	90	45	70	0
	3	h	54	50	50	60	70	0
	4	i	56	50	50	95	70	+1
	4	j	0	1	1	10	1	-2
	10	k	54	95	50	60	10	0
高3	3	a	60	80	99	45	90	+1
	3	b	0	1	10	1	1	-2
	3	c	31	10	1	30	40	-2
	3	d	65	80	99	80	99	+2
	3	e	43	40	50	1	99	-1
	3	f	58	50	70	80	99	+1
	4	g	45	50	15	10	90	0
	4	h	54	90	90	45	20	0
	4	i	28	45	5	1	10	-2
	5	j	62	40	90	99	99	+1
	10	k	48	80	5	80	40	0

表 10

+2	1	1%
+1	12	27%
0	8	42%
-1	2	20%
-2	4	10%
↓		
MSS	↑	
	3回以上のもの数	平均分布

MSS を+2～-2に分けて、その平均分布を指導回数3回以上のものの分布と比較したのが第10表であるが、+1と0のところが多い。先ほど指摘したような道德意識と行為とがすぐ直結せず、その間にもう一つの媒介因子があり、それこそが問題なのだという仮

説をここでも確認しておかねばならぬ。もう少し立ち入って分析を加えてみると、例えば10回指導をうけているのが高2のkと高3のkであるが、彼らはMSSそのものは0段階であるが、高2のkはD領域(社会)が10パーセント、高3のkはB領域(家庭)が5パーセント、D領域(会社)が40パーセントと他領域に比して著しくバランスがくずれていることがめにつく。そして事実、彼らは日常の行為はそのような感じ、すなわち、<ある点ではよくものも知り、一人前の理屈もいえるのが、どこかがおかしい、そのおかしい点をカバーするためにむしろ理屈もいう>そんな感じであるが、このデータはその感じをうらづけてくれるようでもある。彼らを指導する際にはその弱い点とよい点を見きわめて、適切な指導が必要なのだと思う。

⑦ MSS と親子関係と被指導回数

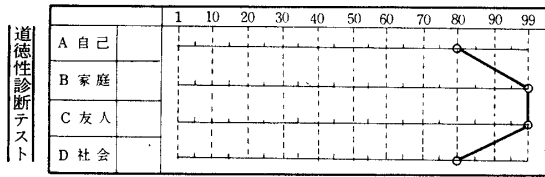
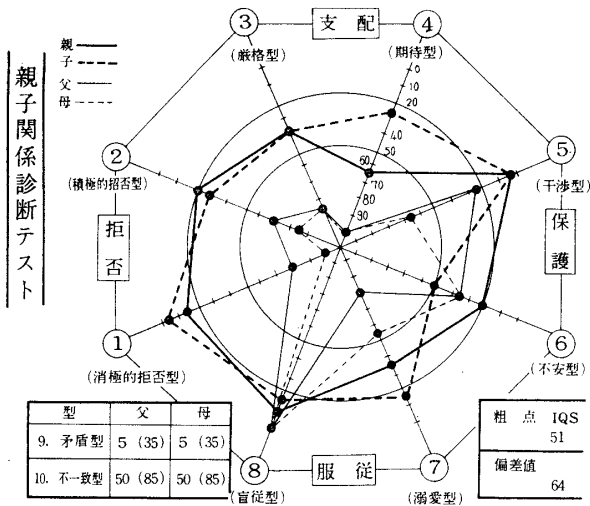
更にそれらの要因をたしかめるために、本校の中学から高校に入学した生徒のうちで、指導された回数の多いものをえらんで、その親子関係をさぐってみた。第9表高1の部の4人がそれである。彼らのひとりひとりの親子関係とMSSの結果と、更に中学時代の指導要録に記載された行動評価とを一つの表にまとめたのが以下の図表である。

例1の高1-cを除いて中学時代の行動評価のどこかで評価Cをもらっていることが目につく。彼の場合、MSSも高く行動評価もオールBで、問題がなさそうであるが、親の態度が危険領域の矛盾型(父0, 母5)を示しているのが気になる。そこに問題があるのではなかろうかと思われる。

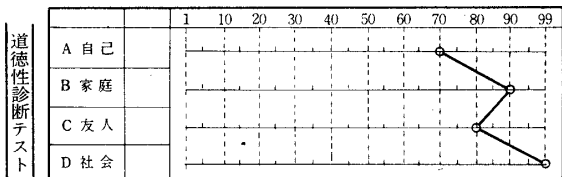
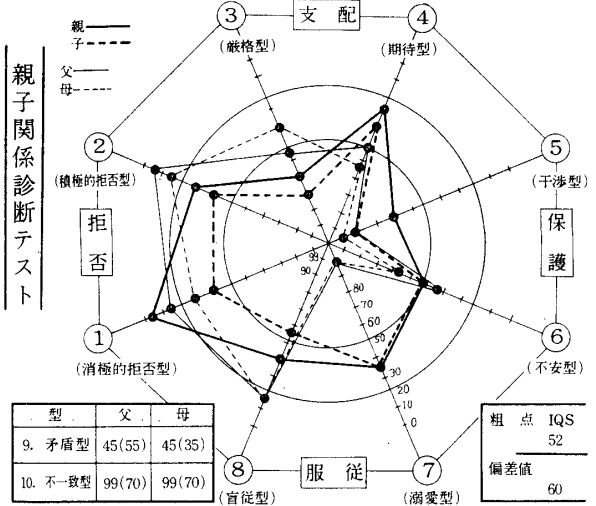
その他の例では、多かれ少なかれ、①～⑧のどれかひとつ或いは二つ以上の危険領域のタイプに属していて、そのような親子関係によるパーソナリテイの歪みが、あるいみでは道德性意識の比較的高さにもかかわらず、問題行動をひきおこす要因となっていないか、と想像される。

MSSが比較的高いにもかかわらず、注意される回数が多い者は結局は、その〔意識—パーソナリテイ—行為〕という関連の環の中核に問題があるわけだが、そのパーソナリテイ形成の有力な要因として、親子関係をみることはできるのではないかとと思われるのである。

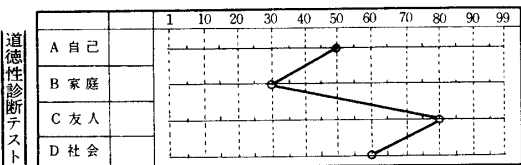
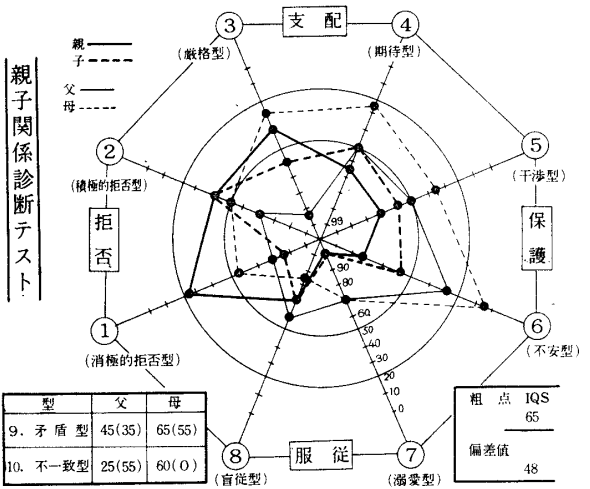
B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導



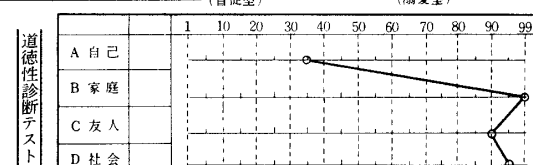
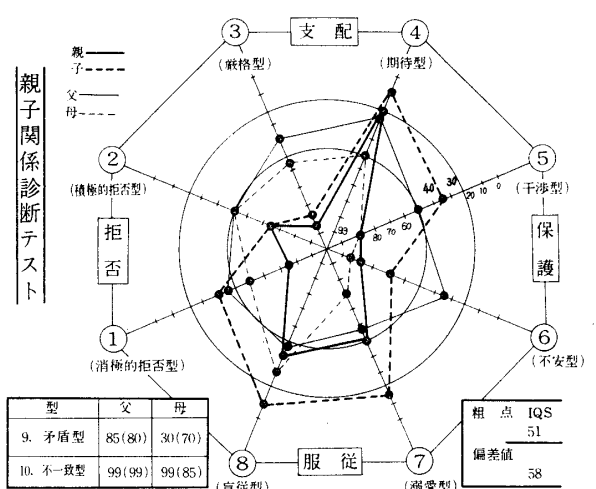
行動評価	基本的生活習慣	自主性	責任感	根拠強さ	自省心	向上心	公正さ	指導性	協調性	同情心	公共心	パナリティ	積極性	情安緒の定
B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B



行動評価	基本的生活習慣	自主性	責任感	根拠強さ	自省心	向上心	公正さ	指導性	協調性	同情心	公共心	パナリティ	積極性	情安緒の定
B	C	B	B	B	B	B	B	C	C	B	C	B	B	



行動評価	基本的生活習慣	自主性	責任感	根拠強さ	自省心	向上心	公正さ	指導性	協調性	同情心	公共心	パナリティ	積極性	情安緒の定
B	B	B	B	C	B	B	B	B	B	B	C	B	B	



行動評価	基本的生活習慣	自主性	責任感	根拠強さ	自省心	向上心	公正さ	指導性	協調性	同情心	公共心	パナリティ	積極性	情安緒の定
C	C	C	C	C	B	B	B	B	B	B	B	B	B	

5. むすび

以上、道徳性診断テストと親子関係テストによる調査を手がかりに、全体的傾向と個々のケースとを考察してきたのであるが、ただ一回だけのテストだけからは、はっきりしたことを断定するのはさしひかえたいが、相当の参考にはなると思われるのである。例えば、本校のように中学と高校とが同一校舎内で同一教官組織の下に教育されている場合、中学と高校とを同

じようにとり扱いがちになりやすいのであるが、それは考え直すべきであるとか、道徳性意識そのものもつ意味とその変化についてどう考えればよいかの問題、更に道徳性意識と行為とをつなぐ要因としてのパーソナリティの問題、そこにおける親子関係の重要性など。

これらの問題について更に今後も検討を加えていきたいと思っている。
(中尾)